

8 免疫不全素因を有さなかったトキソプラズマ脳炎の1例

高橋 陽彦・神保 康志・阿部 博史
高野 弘基*・岡本浩一郎**

立川総合病院 循環器・脳血管センター
脳神経外科
同 脳神経内科*
新潟大学脳研究所**

【はじめに】トキソプラズマ脳炎は通常日和見感染症であり、健常免疫者では鑑別に挙がりにくく診断は困難である。

症例は58歳、男性。2週間前に仕事を解雇され運転中に車をぶつけた。3月21日意識障害で発症し、当科入院。入院時JCS10、右上肢不全麻痺を認めた。MRIで両側大脳白質に多発性にDWI, FLAIR高信号病変を認め、Gd造影で播種状の造影病変を認めた。血液検査で易感染性を示唆する所見は認めず、HIV陰性であった。血清中sIL-2R、髄液中 β 2MGの上昇を認め、当初は中枢神経原発悪性リンパ腫(PCNSL)を疑った。入院後神経症状は自然に改善し、造影病変も淡いため一旦経過観察としたが、造影病変の増大傾向を認め、第52病日ナビゲーションシステムを用いて脳生検を施行した。術直後は神経症状の増悪を認めなかったが、術翌日から不穏状態となった。術後9日ステロイド内服を開始したが、不穏状態、画像所見の改善を認めなかった。病理では血管周囲にリンパ球浸潤を認めたが、免疫染色でPCNSLは否定された。同時期本症例と類似した画像所見を呈するトキソプラズマ脳炎の患者が当科に入院した。トキソプラズマ抗体検査を施行したところ、血清中IgM抗体陽性、IgG抗体陰性と感染早期を示唆する所見を認め、第77病日バクタ6g/日内服を開始した。その後薬疹を認め、クリンダマイシン(CLDM)2,400mg/日内服へ変更した。第86病日DNA PCRで血液、髄液中からトキソプラズマDNAが検出され、トキソプラズマ脳炎と確定診断した。CLDM内服開始後から不穏状態、画像所見の改善を認め、軽度精神機能低下を後遺したが、第147病日自宅へ独歩退院。

【考察】典型的なトキソプラズマ脳炎は、大脳

基底核や皮髄境界部に多発性に腫瘤を形成し、リング状の造影病変を呈する。一方、免疫不全素因を有さないトキソプラズマ脳炎の報告例では腫瘤は形成せず、播種状の造影病変を呈するものが多い。

【結語】免疫不全素因を有さず鑑別に難渋したトキソプラズマ脳炎の1例を報告した。

9 当院における神経内視鏡下血腫除去術の実情

森田幸太郎・中里 真二・野村 俊春
小倉 良介・渡邊 正人

桑名病院 脳神経外科

11 脳神経外科診療とCrowned dens syndromeについて

佐野 正和・矢島 直樹・山下 慎也
相場 豊隆

県立新発田病院 脳神経外科

【目的】軸椎歯突起周囲の石灰化の有病率とCrowned dens syndrome (CDS)の発症率について検討する。

【方法】対象は2015年1月から2016年1月まで当科に入院し、入院時に軸椎歯突起が撮影範囲内にある頭部CTを撮影された554例(0歳~99歳、平均72歳、中央値77歳、男性295例、女性259例)。軸椎歯突起周囲の石灰化を有する症例とCDSを発症する割合、その年齢、性別、原疾患を後方視的に検討した。

【結果】554例中88例(16%)で軸椎歯突起周囲の石灰化を認めた。男性32例、女性56例で、60歳~96歳。88例のうち11例でCDSを発症した。男性6例、女性5例で69~90歳。原疾患は脳梗塞が45例、脳出血が15例、頭部外傷が15例であった。また意識障害のためにCDSの診断は困難ではあるが、CDSが強く疑われる症例も6例(男性1例、女性5例、80~91歳)あり、他部位の偽痛風発症は7例(男性2例、女性5例、71~91歳)あった。

【考察】高齢者、女性、脳梗塞患者では軸椎歯突